



保育の中の物語 (6)

よく見ると

踏みとどまって見えてきた

子どもの世界

岸井慶子



子どもたちが楽しみにしていた今年度初めてのプール遊びは、強風が吹き荒れ中止になった。朝から先生方が準備し、水がたまり始めた大型のビニールプールの周りに、登園した子どもたちが次々集まってくる。名残惜しそうに見ていた子どもたちも、しだいに室内での遊びを始めようと、それぞれ保育室に引き上げた。

寂しくなった園庭の端で、うろろうと周囲を見回しているS子を見つけた。四歳児六月末にしては不安げなその様子に、こちらの注意が止まった。「どうしたのかなあ」と思ってカメラを向けていると、じょうろを両手で持ち、ゆっくりと移動している。しずしずと歩くのは、じょうろの水をこぼさないように



するためだろうか。テラスに立っている大きな柱を何本か通り過ぎ、今度は向きを変えてゆつくり戻ってくる。

ここまで見て、やっと「ああ、場所がわからないのだ」と気づく。どうやら水やりをしようとするプランターが見つけられず、迷っていたらしい。「二年保育なのかな。それにしても、入園して三か月近くになろうとするこの時期、まだ場所の把握ができない子がいるのだなあ」と、今度は興味をもって、意識的にカメラを向けた。

S子は、柱の脇に置かれたプランターを見つけると、ほっとした表情で歩みを早め、水やりをする。じょうろの水をすべて空けると、園舎の端にある小庭に駆け出した。そこにはもう一人の女児が、大きなたらいからじょうろに水をくんでいた。S子も並んでしゃがみ、黙って水をくむと、再び両手で大切そうに持って歩き始めた。「また水やりだ。栽培物に対する興味・関心がある子なのだろう」と思いながら、ここでカメラのスイッチを切り、保育室内の遊びの様子を観察しようと考えた。

ところが、今度も、S子は同じように迷い始めた。同じ場所であらうろと周囲を見回している。「一回ではまだ場所を覚えられないのだ。そんなものなのだろうか。子どもは案外こんなことでも、神経を使いながら毎日生活している



のかもしれない」と思いながら、S子の様子を見続けた。

同じように、迷い、水やりをしたS子は、たらいのところへ大急ぎで走って戻る。そして水をくむと、再びじょうろを両手で持ち歩き始めた。「いくらなんでも、三回目なら迷わないだろう。今度はすんなり目的のプランターを見つけれらるだろう」と思いながら見ていた。

しかし、こちらの予想は裏切られた。S子はまたまた迷い、やっと目的のプランターを見つけ、じょうろの水をすべて空けた。

「いったい何回迷ったら、場所が覚えられるのだろう。その上、あんなに小さなプランターに、見ているだけでも三杯の水を空けている。プランターの中はびしょびしょに湿らない。まだ植物の側になって水の量を考えるのは難しいのだな」。栽培物への興味・関心もその程度のもなのだ、と理解した。

さて四回目。今度は迷うことなく目的のプランターに行き、じょうろの水を最後の一滴まで空けた。

そこでまた私は驚いた。S子の水やりは「同じプランター」の「同じ部分」に対して行われている。一つのプランター全体に水やりをしているわけではない。そういえば、その前もその前も、プランターの手前側に水をやっていた。その驚きを担任に確認すると、少し前にクラスでいくつかのプランターにヒマ



ワリの種をまいたのだが、S子は「そのプランター」の「その辺り」にまいたという。自分がまいた種に対するS子の思いの深さに触れた気がした。「栽培物への興味・関心」という一般的なものではなく、もつと特別な感情だった。

この日の朝、今年初めてのプールを目の前にして、子どもたちはいろいろな姿を見せてくれた。男児の数人は、プールに水をためているホースを見ているだけでは我慢できず、取り合いを始めケンカとなった。ある子は、わざと水を掛けられたと思い、相手をプールの中に洋服のまま押し倒し、先生に厳しく注意された。子ども同士のちょっとした誤解が、どのようにケンカに発展し、それを周囲の幼児が（大人同士は了解し、笑って済ませられそうなことでも）どのように教師に訴え問題にしていくか、という点で非常に興味深くドラマチックな出来事であった。

一方、ここで取り上げた水やりのエピソードは、地味ではあるが、忘れられないものだ。どんなに何気ない子どもたちの動きにも、必ず子どもたちの世界が表現され、気づかないのはこちらの側の見方によるものだ、ということを教えられたからだ。保育の中の物語は、辛抱強く踏みとどまり、見続けなければ見えてこない。そして子どもたちの物語は観察者の予想や期待、疑問や驚きなどに応えるようにして、その姿を現すのではないだろうか。（鎌倉女子大学短期大学部）